

1) 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2) 研究会基本情報

タイトル：「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」
(2020年度第2回研究会)

日時：2020年11月28日(土曜日)午後7時より午後9時30分

場所：オンライン開催

1. 梶茂樹 (AA 研共同研究員, 京都産業大学)

「スワヒリ語の ndiyo『はい』と hapana『いいえ』の由来に関するニョロ語からの考察」

2. 古本真 (AA 研共同研究員, 日本学術振興会海外特別研究員/エセックス大学)

「主題を照応する指示詞：スワヒリ語マクンドゥチ方言の指示詞の文法化」

3. 全員

「プロジェクトの振り返りと今後の展開についての議論」

今研究会は3年間のプロジェクトの最後の研究会として、研究発表2件とともに、プロジェクト全体の振り返りが行われた。2件の研究発表は、いずれもスワヒリ語の文法特徴を、通バントゥ的な、また一般言語学的な視点から捉えなおす試みであった。それによって(図らずも)バントゥ諸語のなかにおけるスワヒリ語の通時的、共時的な多面性が照らし出されることとなり、スワヒリ語諸変種の多様性をテーマとしたこの研究会の最後を飾るにふさわしい活発な議論が交わされた。第1発表の要旨、および第2発表の配布資料は以下を参照されたい。

続く全体討論では、前回研究会での討論をもとに構想した後継課題が無事採択されたことが報告された。アフリカ的多言語混在状況を前提とし、そのような環境でこそ生じうるマルチリンガルな現象(単一言語を対象とした記述研究では「ノイズ」として排除されるような現象)にまで射程を広げる次期研究会においても、本研究会で培った成果発信のノウハウや国際的な研究ネットワークが活用されることが期待される。国際学会(第7回国際バントゥ諸語学会@ケープタウン)におけるパネルの開催とそれに基づく国際誌 *Swahili Forum* の特別号の公刊、またマインツ大学でのスワヒリ語変種研究に関する国際会議の開催といった成果を上げることができたのも、共同研究者諸氏の積極的な参画のみならず、共同研究拠点係をはじめとするAA研のバックアップがあつてのことである。3年間のプロジェクト期間における諸方面のご協力に対し、ここに記して感謝申し上げます。次第である。

(文責：品川大輔)

[要旨]「スワヒリ語の ndiyo『はい』と hapana『いいえ』の由来に関するニョロ語からの考察」

現代スワヒリ語では、ndiyo「はい」と hapana「いいえ」は比較的よく使われる単語である。hapana の由来は、ha-pa-na (動詞の否定標識-クラス 16 の主語接頭辞-「共に」を意味する小辞) であることは容易に分る。つまり、「(その) 場所にはない」>「いいえ」というような変化である。それに対し、ndiyo は現代スワヒリ語の知識で分析することはできない。報告者は、現在ウガンダ西部のバンツー系諸語を調査しているが、この ndiyo は、例えばニョロ語の ndiyô に相当する文から来ていると推測する。n-li-yo (私-be 動詞-「そこ」を意味する接語)「私はそこにいる」である。この表現は人を訪問して、Oríyô?「(あなたは) いますか」と言われた場合の返事「私はいます」としてよく用いられるものである。本来、自分自身のその場での存在を示す ndiyo が、スワヒリ語では、-li ~ -di の交替の不透明さ (形態音韻的交替)、欠如動詞-li の使用の極端な制限、さらに接語-yó の不使用と相まって分析不能となり、たんに「はい」という肯定だけを表すようになったと考えられるのである。

主題を照応する指示詞 スワヒリ語マクンドゥチ方言の指示詞の文法化

古本 真
日本学術振興会／エセックス大学

1

マクンドゥチ方言の指示詞

(1) *uyo* *mwanamke ka-na-chesa=yo*
DEM.MED.1 1.woman SM1-IPFV-laugh.CAUS=DEM.MED.1
「その女性は笑わせる」

	BF (PROX)	CF (PROX)	BF (MED)	CF (MED)	BF (DIST)
cl1	yuno	=yu	uyo	=yo	yulya
cl2	wano	=wa	wao	=o	walya
cl3/11	uno	=u	uo	=o	ulya
cl4	ino	=i	iyo	=yo	ilya
cl5	lino	=li	ilyo	=lyo	lilya
cl6	yano	=ya	yayo	=yo	yalya
cl7	kino	=ki	icho	=cho	kilya
cl8	vino	=vi	ivyo	=vyo	vilya
cl9	ino	=i	iyo	=yo	ilya
cl10	zino	=zi	izo	=zo	zilya
cl15/17	kuno	=ku	uko	=ko	kulya
cl16	vano	=va	avo	=vo	valya
cl18	muno(~mno)	=mu	umo	=mo	milya

(R-I 2002)

2

この発表の目的

1. 指示詞縮約形の形態統語特徴の記述
特に主題を照応することの確認 (cf. 古本 2017)
2. 指示詞縮約形が主題を照応する代名詞へと
文法化しつつあるという仮説の提示

3

マクンドゥチ方言について

- 基本語順はSVO
ただし情報構造に応じて変わる（後述）
- 後置修飾
ただし指示詞はNPの前にも現れる
- 動詞は主語や目的語と呼応する接頭辞でマークされる
- 名詞クラスがある



Nurse & Hinnebusch (1993)

4

指示詞縮約形の形態統語特徴

- 指示詞縮約形は接語である (vs. 基本形)
- 指示詞縮約形は名詞を修飾できない (vs. 基本形)
- 指示詞縮約形は述語の前に現れる名詞句と呼応する (vs. 基本形)
- 指示詞縮約形と呼応する名詞句は主題化されている
- 指示詞縮約形と呼応する名詞句は同一節内に現れるとは限らない

5

5

指示詞縮約形は接語である

- (2) a. *tu-na-(ku)nywa maji*
SM1PL-IPFV-OM1-drink water
 「私たちは水を飲む／飲んでいる」
- b. *tu-na-*(ku)nywa*
SM1PL-IPFV-OM1-drink
 「私たちは飲む／飲んでいる」
- (3) a. *ka-na-ja vano*
SM1-IPFV-come DEM.PROX.16
- b. **ka-na-ja=va*
SM1-IPFV-come=DEM.PROX.16
- c. *ka-na-ku-ja=va*
SM1-IPFV-KU-come=DEM.PROX.16
 「彼(女)はここに来る」
- (4) *u-si-m-k^he ruhusa=yo*
SM2SG-NEG-OM1-give.SBJV permit=DEM.PROX.1
 「あいつに(水浴びに行く)許可を与えてはいけない」

6

6

指示詞縮約形は名詞を修飾できない

- (5) a. *m̩-m-ono mwalimu yuno*
SM1SG-OM1-see.PFV 1.teacher DEM.PROX.1
 「I saw this teacher.」
- b. **m̩-m-ono mwalimu=yo*
SM1SG-OM1-see.PFV 1.teacher=DEM.PROX.1
 「私はこの先生を見た」

→ 単に指示詞の音形に変化が生じているわけではない

7

7

指示詞縮約形は述語の前に現れる名詞句と呼応する

- (6) a. *baskeli ino i-bomoko=i(*=yo)*
9.bicycle DEM.PROX.9 SM9-be_broken.PFV=DEM.PROX.9
 「この自転車は壊れた」
- b. *baskeli iyo i-bomoko=yo(*=i)*
9.bicycle DEM.MED.9 SM9-be_broken.PFV=DEM.MED.9
 「その自転車は壊れた」
- c. **baskeli iyo i-bomoko iyo*
9.bicycle DEM.MED.9 SM9-be_broken.PFV DEM.PROX.9

8

8

指示詞縮約形と呼応する名詞句は主題化されている

述語に先行する主語以外の名詞句とも指示詞縮約形は呼応する

(7) *yuno* *mwalimu* *jana nyi-m-kut^hu=yu*
DEM.PROX.1 1.teacher yesterday SM1SG-OM1-meet.PFV=DEM.PROX.1

「この先生には、私は昨日会った」 (目的語と呼応する例)

9

9

指示詞縮約形と呼応する名詞句は主題化されている

述語に先行する目的語は主題化されている可能性が高い

(cf. Kimenyi 1980, Yoneda 2011)

(8) A: *ku-okoto* *nini*
SM2SG-pick_up.PFV what
“What did you pick up?”

B: *nyi-okoto* *embe*
SM1SG-pick_up.PFV mango

B': #*embe* *nyi-okoto*
9.mango SM1SG-pick_up.PFV

「私はマンゴーを拾った」

10

10

主題と呼応することを確認する三つのテスト

- 事象報告文 (中立叙述) の主語と呼応するか
- Wh句に対応するか
- *kila* 'every' を含む名詞句と呼応するか

11

11

事象報告文の主語と一致するか

事象報告文 (中立叙述) の主語は主題ではない (Lambrecht 1994)

A: What happened?

B: The children went school.

(9) A: *va-na* *nini mbona wat^hu wengi*
SM16-have what why 2.people many.2
「そこに何が？なぜたくさんの人がいるの？」

B: *ḿzungu ka-na-cheza ngoma*
1.white_person SM1-IPFV-play dance

B': #*ḿzungu ka-na-cheza ngoma=yu*
1.white_person SM1-IPFV-play dance=DEM.MED.1
「白人が踊っている」

12

12

指示詞縮約形はWh句に対応するか

- (10) A: juma k-evu ka-ja vano (11) A: juma k-evu ka-ja wapi
 1.PN SM1-COP.PST SM1-come.PFV DEM.PROX.16 1.PN SM1-COP.PST SM1-come.PFV where
 「ジュマ (人名) はここに来た?」 「ジュマ (人名) はどこに来た?」
- B: ee k-evu ka-ja vano B: k-evu ka-ja vano
 yes SM1-COP.PST SM1-come.PFV DEM.MED.16 SM1-COP.PST SM1-come.PFV DEM.MED.16
 「彼はここに来た」 「彼はここに来た」
- B': ee k-evu ka-ja=va B': #k-evu ka-ja=va
 yes SM1-COP.PST SM1-come.PFV=DEM.MED.16 SM1-COP.PST SM1-come.PFV=DEM.MED.16
 「彼はここに来た」 「彼はここに来た」

13

13

指示詞縮約形はkila 'every' を含む名詞句と呼応するか

全量詞を含む名詞句は特定の指示対象をもたないため、主題表現とならない (ことが多い) (Lambrecht 1994, Jacobs 2001)

- (12) *kila m̥tʰu ka-ja=yɔ
 every 1. person SM1-come.PFV=DEM.MED.1
 Intended 「みんなは来た」

14

14

指示詞縮約形と呼応する名詞句は、主語や目的語に限らない

- (13) a. kajengwa nyi-okoto embe=**ko**
 pn (CL15) SM1SG-pick_up.PFV mangoe(s)=DEM.MED.15
 「カジェングワ (地名) で、私はマンゴーを拾った」 (場所)
- b. wakati a-ø-o-vyaligwa mwanangu ny-evu m̥ji-ni=**o**
 11.time SM1-PFV-REL11-bear.PASS child:my SM1SG-COP.PST town-LOC=DEM.MED.11
 「私の子供が生まれたとき、私は街にいた」 (時)
- c. yuno mwanak^hele baskeli yake i-bomoko=**yu**
 DEM.PROX.1 1.child 9.bicycle his.9 SM9-be_broken.PFV=DEM.PROX.1
 「この子供は、自転車がこわれた」 (所有者)

15

15

指示詞縮約形の特徴のまとめ

- 主題標示と関係している
 - しかし、主題構成素を直接マークするわけではない
 - 主題構成素と必ずしも共起するわけではない
- 単に「主題標識」とする分析は妥当なのか?
 cf. 日本語の「は」、Diessel & Breunnesse (2020)

16

16

指示詞縮約形の特徴のまとめ

- 拘束形態素（接語）である
 - 節内の名詞句と呼応することがある
 - 代名詞のように機能することもある
 - 主題標示と関係している
- ➔ 主語接頭辞 (SM) や目的語接頭辞 (OM) との類似

17

17

SMやOMは、主題名詞句を照応する代名詞に由来する

(Givón 1976, cf. Li & Thompson 1976, Bresnan & Mchombo 1987, Morimoto 2002)

Topic agreement

Subject agreement

The man, he came ⇒ The man he came
TOP PRO SUBJ AGR

Topic Shift (“marked”)

Afterthought (“semi-marked”)

Neutral (“demarked”)

the man, I saw him → I saw him, the man → I saw-him the man
TOP PRO PRO TOP AGR

指示詞縮約形の発達は、代名詞への変化（文法化）の
variantととらえるべき現象ではないか (cf. Siewierska 2004)

18

18

マクンドゥチ方言の指示詞は前方照応することができる

(14) mama ka-na-tenda hadithi ama baba angu ka-na-tenda hadithi
1.mother SM1-IPFV-do 10.story or 1.father my SM1-IPFV-do 10.story

n-si-lale maana ch^ha-sizia hea zi-ka-tendwa izo
SM1-NEG-fall asleep.SBJV reason SM1SG:PROB-doze but SM10-CONSC-do.PASS DEM.MED.10

「母が話をしてくれた、あるいは私の父が話しをしてくれた、私が寝てしまわないように。私がうとうとしてしまうだろうから。だけどそれら（お話）はされたものだった。」（中称の例）

(15) kamba na=ḿkasi vit^hu vino ku-vi-tuu wapi
9.rope COM=3.scissors 8.things DEM.PROX.8 SM2SG-OM8-put.PFV where

「ロープとハサミ、おまえこれらのものをどこに置いた？」（近称の例）

19

19

TOPIC: A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given situation the proposition is construed as being about this referent. (Lambrecht 1994; 131)

“[I]t is strictly speaking not with the lexical topic NP but with the **anaphoric pronominal topic expression** that the pragmatic aboutness relation between the referent and the proposition is expressed” (Lambrecht 1994: 188)

20

20

特定の指示対象をもたない表現を用いたテストで、
当該の主題化構文が、**aboutness**を義務的に表すかが調べられる
(Jacobs 2001)

- (13) a. *kila mt^hu nyi-m-kut^hu=**yo**
every 1.person SM1SG-OM1-meet.PFV=DEM.MED.1
- b. kila mt^hu nyi-m-kut^hu
every 1.person SM1SG-OM1-meet.PFV
"I met everyone."

21

指示詞縮約形の共起制限

- (19) a. fatuma embe ka-zi-okoto=**yo**
1.PN 10.mangos SM1-OM10-pick_up.PFV=DEM.MED.1
- b. fatuma embe ka-zi-okoto=**zo**
1.PN 10.mangos SM1-OM10-pick_up.PFV=DEM.MED.10
- c. *fatuma embe ka-zi-okoto=**yo=zo**
1.PN 10.mangos SM1-OM10-pick_up.PFV=DEM.MED.1=DEM.MED.10
- d. *fatuma embe ka-zi-okoto=**zo=yo**
1.PN 10.mangos SM1-OM10-pick_up.PFV=DEM.MED.1=DEM.MED.10

「ファトマはマンゴーを拾った」

22

主題は一つに限られるのか？

“Sentences typically have **only one topic**, which can be explained within Reinhart’s file-card metaphor:...” (Krifka 2008)

“Nothing in principle prevents an utterance from having **several topics** that are equally under discussion,...” (Nikolaeva 2001, cf. Lambrecht 1994)

KMの指示詞と呼応する名詞句は、単なる主題表現ではなく、より特定の情報構造上のステータスを与えられているものではないか？

23

指示詞縮約形は必ずしも現れるわけではない

- (18) uyo mwanamke ka-na-chesa=**yo**
DEM.MED.1 1.woman SM1-IPFV-laugh.CAUS=DEM.MED.1
- we uyo mkwe-o
PRO.2SG DEM.MED.1 1.mother-in-law-your

uyo mkwe mt^hu uyo ka-na-chesa kweli
DEM.MED.1 1.mother-in-law 1.person DEM.MED.1 SM1-IPFV-laugh.CAUS really

「その女性は笑わせるんだよ、そのあなたの義母（となる人）は。その義母は、その人は本当に笑わせるんだよ」

聞き手にとって主題であるという解釈を容易にする
(活性化する) ために現れる？ (cf. Lambrecht 1994)

二番目に現れないのは既に活性化されているから？

24

通時的視点の導入によって説明されること

- 近称と中称が形式的に区別の残存 (cf. Yoshida 2019)
- 1/2人称と呼応することはない (cf. Hawkinson & Hyman 1974, Givón 1976)

文法化の結果生じた標識は、文法化前の特徴を保持していることがある
(Heine et al. 1991, Bybee et al. 1994)

25

25

遠称は非縮約形が主題と呼応する

- (17) a. **baskeli** *iyó* **i-bomoko=yo**
9.bicycle DEM.MED.9 SM9-be_broken.PFV=DEM.MED.9
- b. ***baskeli** *iyó* **i-bomoko** *iyó*
9.bicycle DEM.MED.9 SM9-be_broken.PFV DEM.MED.9
「その自転車は壊れた」
- c. **baskeli** *ilya* **i-bomoko** *ilya*
9.bicycle DEM.DIST.9 SM9-be_broken.PFV DEM.DIST.9
「あの自転車は壊れた」

意味>形式という変化の順序を仮定するのであれば、近称・中称では既に形式の変化まで生じている一方、遠称は意味だけが変化(拡張)した段階にある
(cf. Heine & Reh 1984, Heine et al. 1991)

26

26

結論

- マクンドゥチ方言の指示詞縮約形は主題標識に関係する
- SMやOMと似たプロセスで、あらたな拘束代名詞が出現か
(cf. Güldemann 2003)
- その機能は？(aboutnessの標示？活性化？)
- 他の言語の拘束代名詞との関連は？(cf. single vs. multiple OM)
- 他のスワヒリ語諸変種、バントゥ系言語で指示詞が似たような用法をもつことはないか(形式の変化はなくとも)
- 似たような変化は他言語でも生じているのではないか(金田 2004, 2018)

27

27

参考文献一覧

- Bresnan, J., & Mchombo, S.A. (1987) Topic, pronoun, and agreement in Chicheŵa. *Language*, 63, 741–782.
- Bybee, J.L., Perkins, R. & Pagliuca, W. (1994) *The Evolution of Grammar: The Grammaticalization of Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Diessel, H. & Breunese, M. (2020) A typology of demonstrative clause linkers. In Å. Næss, A. Margetts & Y. Treis (Eds.), *Demonstratives in Discourse*. (pp. 305–341). Berlin: Language Science Press.
- Givón, T. (1976) Topic, pronoun and grammatical agreement. In C. Li (Ed.), *Subject and Topic* (pp. 149–188). New York: Academic Press.
- Güldemann, T. (2003) *Grammaticalization*. In D. Nurse & G. Philippson (Eds.), *The Bantu Languages*. (pp. 182–194). London: Routledge.
- Jacobs, J. (2001). The dimensions of topic-comment. *Linguistics*, 39, 641–682.
- Hawkinson, A. & Hyman, L. (1975) Hierarchies of natural topic in Shona. *Studies in African Linguistics*, 5, 147–170.
- Heine, B. & Reh, M. (1984) *Grammaticalization and Reanalysis in African Languages*. Hamburg: Helmut Buske.
- Heine, B., Claudi, U. & Hünnemeyer, F. (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kimenyi, A. (1980) *A relational grammar of Kinyarwanda*. Berkeley: University of California Press.
- Krifka, M. (2008). Basic notions of information structure. *Acta Linguistica Hungarica*, 55(3-4), 243–276.
- Lambrecht, K. (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Morimoto, Y. (2002) Prominence mismatches and differential object marking in Bantu. In M. Butt & T.H. King (Eds.), *Proceedings of the LFG-02 Conference* (pp. 292–314). Stanford, CA: CSLI Publications.
- Nikolaeva, I. (2001) Secondary topic as a relation in information structure. *Linguistics*, 39, 1–50.
- Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993) *Swahili and Sabaki: A linguistic history*. Berkeley: University of California Press.
- Racine-Issa, O. (2002) *Description du kikaa: Parler swahili du sud de Zanzibar: Suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters Publishers.
- Siewierska, A. (2004) *Person*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yoneda, N. (2011) Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles. *Lingua*, 121, 754–771.
- Yoshida, Y. (2019) The Sogdian articles from the viewpoint of general linguistics. In A. A. Catt, R. I. Kim & B. Vine (Eds.), *QAZZU warrai Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida* (pp. 420–431). New York: Beech Stave Press.
- 金田章宏 (2004) 「述語の指示性—指示詞の文法化と「コンアリエーション」」『国文学 解釈と鑑賞』7月号, 54–67.
- 金田章宏 (2018) 「山形南陽方言の指示の諸相」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会資料
- 古本 真 (2017) 「スワヒリ語マクンドゥチ方言における主題を標示する指示詞の縮約形」『第154回日本語学会予稿集』152-157

28

28